

第39回 三重歯科・口腔外科学会抄録

The 39 th Mie Meeting of Dentistry and Oral Surgery, Abstracts

日 時：平成23年12月10日

場 所：三重県口腔保健センター

1. 下顎骨骨肉腫 HOSM-1 細胞での Cationic Liposome を用いた Bax mRNA 導入による抗腫瘍効果 ～caspase-3 活性と apoptosis の誘導についての検討～

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学¹
国立病院機構三重病院歯科口腔外科²

○ 竹岡高志^{1,2}, 奥村健哉¹, 乾真登可¹,
田川俊郎¹

Bax は Caspase-3 を活性化し Apoptosis を誘導する。また、遺伝子導入には plasmid を mRNA に替えることにより高い導入効率が期待できる。今回、下顎骨骨肉腫 HOSM-1 細胞に対して Bax mRNA の導入を行い、Caspase-3 の活性と抗腫瘍効果について検討を行った。【材料】細胞：HOSM-1；ヒト下顎骨骨肉腫細胞株。Liposome：DOPE と DOTAP により作製。Bax plasmid：pcDNA 3.1 (+)-Bax。Bax mRNA：Bax plasmid より作製。【方法】導入効率測定は GFP-assay, Bax タンパク発現は Western Blotting, Caspase-3 活性は Colorimetric assay, Apoptosis は TUNEL assay で評価。【結果】mRNA の導入効率は 93.4% で plasmid の約 1.5 倍に向上した。Bax mRNA の導入により Bax タンパク発現はさらに増強し、Caspase-3 活性は Bax plasmid の約 1.54 倍に上昇した。Apoptosis は 52.9% を占めており、plasmid の約 1.7 倍であった。【考察】本療法は下顎骨骨肉腫細胞に対して、Caspase-3 の活性化により Apoptosis を多く誘導し、従来の plasmid を用いた遺伝子療法より高い抗腫瘍効果が期待できる。

2. PDE 2 阻害剤によるヒト口腔悪性黒色腫 PMP 細胞の転移機構への影響

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学¹
南勢病院歯科²

○ 森田 寛^{1,2}, 清水香澄¹, 関田素子¹,
村田 琢¹, 田川俊郎¹

【目的】phosphodiesterase (PDE) は、細胞内のセカンドメッセンジャーである cAMP や cGMP を分解し、様々な生理作用を調節している。以前われわれはヒト口蓋由来悪性黒色腫 PMP 細胞 (PMP) で、PDE 2 が増殖能と浸潤能を調節するが、運動能には関与しないことを報告した。しかし接着能への影響は不明である。そこで今回は PDE 2 阻害剤による PMP の接着能への影響を検討した。【材料および方法】細胞は当教室で樹立継代しているヒト口蓋由来悪性黒色腫 PMP 細胞を使用し、PDE 2 阻害剤は erythro-9- (2-hydroxy-3-nonyl) adenine (EHNA) を使用した。type-IV collagen でウェルの底面をコーティングした 6-well plate に PMP を播種し、5 分、10 分、15 分、20 分、30 分、60 分後に接着能を測定した。更にその結果から 5 分の培養時間で、control 群と EHNA 添加群について検討した。

【結果および考察】接着細胞数は 5 分から 20 分までは大きな変化はなく、30 分以降急速に増加した。培養時間が 5 分の場合、control 群と比較して 50 μ M, および、100 μ M EHNA 添加群では接着細胞数が多くなっていた。以上の結果より PDE 2 が接着能に関係する可能性が示唆された。今後は長時間培養下および、異なる基質に対する接着能への影響を更に調べていく予定である。

3. 介護福祉学科学生に対する口腔ケア指導の評価

ユマニテク医療福祉大学校歯科衛生学科

○ 笹間滋代, 松岡陽子, 後藤澄代,
渡瀬恵子

【目的】介護の現場において、口腔ケアの重要性やその活動が期待される。そこで、本校介護福祉学科学生に口腔衛生に対する意識調査を試みた。

【対象・方法】介護福祉学科2年生56名（男子21名、女子35名）について、口腔ケアの重要性について講義（180分）を行い、その後、実際に学生間で相互実習（180分）を実施し、口腔ケアについての意識の変化を事前事後で検討した。

【結果】口腔衛生に対する関心は講義前に比べ講義後高くなった。口腔ケアの重要性は認識しているものの具体的な方法は理解できていなかった。専門的な歯科の授業を体験したことにより、口腔ケアの効果の認識は高くなったが、知識を習得したことで負担度は高くなる結果となった。【まとめ】将来介護施設等に勤務することになる学生に、口腔ケアの指導を行ったことで、学生が介護の現場において口腔ケアを日常の業務と捉え、それが重責であることを認識したことは大きな成果であった。今後もカレッジ内の医療福祉系他学科への積極的な関与が必要であると考えている。

4. 新課程における臨床実習Ⅰの教育効果について

三重県立公衆衛生学院歯科衛生学科

○ 前田尚子, 岡 景子, エィガン直美,
岡村哲子, 下村真理, 中世古文香

【目的】平成22年4月より新課程による教育が始まり、臨床実習については約1.4倍の時間数となり、歯科衛生士教育に対する期待が寄せられている。今回、1年次後期で履修した臨床実習Ⅰについて調査を行い、その教育的効果を検討したので報告した。【対象】3年制課程第1回生30名。【調査方法】質問紙調査を実習前・実習後・2年生9月の3回にわたり実施、回収率100%。

χ^2 検定にて分析を行った。【結果および考察】清潔な身だしなみについては、臨床現場で医療の本質を学び清潔の観念が育まれたので、学内でもその効果は継続した。挨拶・返事・言葉遣いなどの態度や自覚については、実習直後の効果は顕著であったが、経時的変化による持続は難しく、教育に工夫が必要と考えられた。学習効果については、実習経験が臨床歯科学の講義と実践を結びつけて考える助けとなったが、履修時期により理解度が異なった。また歯周療法学の理解不足の一因として、歯周疾患予防学と統合して学習できなかったところがあり、講義時期や基礎実習の検討が示唆された。【結語】臨床実習Ⅰを経験した事により、学生の医療人としての自覚は高まり、臨床歯科学と実践が繋がり理解を助けた。

5. 市販の口腔ケア用ジェルの抗菌性、粘度（硬さ）、価格の比較

済生会松阪総合病院歯科口腔外科

○ 近田紀子, 川口治奈, 稲垣奈央子,
田中千賀, 日浦美和, 鈴木康昭,
高井英月子, 佐藤耕一

【目的】口腔ケアジェルは多数市販されており、その選択に迷うこともある。そこで、誤嚥性肺炎と口腔カンジダ症の原因菌に対する抗菌性、粘度（硬さ）、価格について比較した。【方法】抗菌性については、8種類の口腔ケアジェルを染み込ませた濾紙ディスクを2種類のカンジダ菌と4種類の誤嚥性肺炎起炎菌を塗布した培地に置き、培養後の阻止円を比較した。粘度は37±2℃で粘度計を用いて計測した。価格は1g当たりの価格を比較した。【結果と考察】2種類のカンジダ菌と1種類の誤嚥性肺炎起炎菌に対し、リフレケアH®が最も強い抗菌性を示し、オプトレオーズ®とビバジェルエット®は弱い抗菌性を示した。他の口腔ケアジェルは抗菌性を示さなかった。オーラルバランス®が最も粘度が高かった。1g当たりの価格の比較では、最大で3倍の差があった。これらの結果から、口腔ケアジェルには様々な個性があることが分かった。口腔カンジダ症、誤嚥性肺炎のある患者では抗菌性が口腔ケアジェル選択の

指標となることが示唆された。当院では、抗菌性、操作性、経済性を考慮し、さらに香りや味を患者様の好みに合わせて、口腔ケアジェルを使い分けるよう心がけている。

6. 歯科衛生士学生を対象とした手洗い実習の効果について

伊勢保健衛生専門学校

○ 奥山真理, 山川朋香, 松本由美,
前田香代子, 中西康弘

医療従事者にとっての手洗いの意識レベルの向上を目的に本校 1 年生 28 名を対象として、Brevis Corporation 製、手洗い検査器を用いた手洗い実習を行った。実習の前後において、学生の手洗いの効果と意識変化について検討した。手洗いの方法として、流水下での手洗い、石鹼を使用した手洗い、石鹼を使用したもみ洗い、手洗いブラシを利用した手洗いをを行い、以下の結果を得た。各手洗い方法での残った汚れの数値は、手の平側で流水下 55.2%、石鹼を使用した手洗い 38.0%、もみ洗い 25.0%、手洗いブラシの使用 12.2%であった。手の甲側で、流水下 61.0%、石鹼を使用した手洗い 41.4%、もみ洗い 28.2%、手洗いブラシの使用 12.4%であった。以上の結果により、手洗いの方法により汚れの残存率が変化することが認識できた。また、手洗い検査器を使用することにより汚れの残りやすい部位を視覚的に体験することができ、実習後積極的に手洗いする学生が増えたことから、手指衛生の意識が向上したと考えられる。

7. 当科におけるインプラント治療前のプラークコントロールについて

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 駒田真澄, 渡辺恵美子, 河宮和世,
坂口幹子, 小林 香, 永田 心,
奥村健哉

【目的】当科でのインプラント埋入の条件は、

オレリーのプラークコントロールレコード (PCR) 20%以下を 2 回達成することである。当科におけるインプラント治療前のプラークコントロールについて検討し、報告した。【対象・方法】2000 年 2 月から 2011 年 11 月までにインプラント治療を希望し、初期治療を行った 143 例を対象とした。検討項目は初期治療の実施状況、埋入条件達成率、初回の PCR、埋入条件達成時の PCR、達成までの回数、埋入後の経過とした。【結果】初期治療は、当科にて行った例が 106 例で、他院は 20 例であった。無菌顎や多数歯欠損の 9 例および悪性腫瘍手術後などの 8 例、計 17 例では埋入条件は考慮しなかった。当科で初期治療を行った 106 例のうち、途中で断念した例が 8 例あり、埋入条件達成率は 92.5%であった。初回の PCR は平均 $45.67 \pm 20.65\%$ であったのに対し、埋入条件達成時の PCR は平均 $11.01 \pm 4.45\%$ と、有意差がみられた。達成までにかかった回数は 2~9 回、平均 3.98 回であった。インプラント周囲炎により脱落、撤去した例は 8 例あり、93.3%は経過良好である。【考察】埋入条件達成率は 92.5%と高い値であり、短期間で PCR も減少していることから、患者のインプラント治療に対するモチベーションの高さが伺えた。

8. 榊原温泉病院での訪問歯科への取り組み

榊原温泉病院歯科口腔外科¹

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学²

○ 谷口ゆき¹, 油家千恵¹, 渡邊由裕^{1,2},
乾眞登可^{1,2}

高齢化社会が急速に進む中、通院困難な患者のための医療体制の整備が不可欠となっている。榊原温泉病院歯科口腔外科では、平成 22 年 9 月より通院困難な患者の要望に応えるために訪問歯科を開設した。そこで今回、訪問先の患者数、全身疾患や処置内容等の集計結果を報告した。【結果】対象患者数は 72 名 (男性 22 名, 女性 50 名, 平均年齢 79.8 歳)。全身疾患は脳梗塞, 脳出血などの脳血管系疾患が最も多く 29%, 次に循環器系疾患 25%, 脳神経系疾患 25%, 骨折 5%と続い

た。スケーリング等の歯周処置が最も多く 70%、次に補綴処置 19%。補綴処置は義歯調整、義歯修理が多くみられた。外科処置は 3%であった。

【まとめと考察】歯周処置が 7 割を占め義歯調整等の補綴処置が 2 割しかなかったのは、寝たきりで義歯を使用していない患者が非常に多いためであった。寝たきりで意思疎通困難である患者に対する治療方針等についての連絡は施設スタッフを通じて家族に行うことが多く口腔環境を改善し、QOL の向上を図るためには、それぞれの患者の状態を十分に把握し、情報を共有することが大切であると考えられた。

9. 三重県内歯科衛生士の状況 ～歯科衛生士専門学校卒業生へのアンケート結果から～

三重県歯科医師会

○ 齋藤 弘, 林 尚史, 芝田憲治,
峰 正博

県内の歯科衛生士不足対策として、三重県歯科医師会では昨年度より離職衛生士に対する復職支援セミナーを行うこととした。それに先だって県内の歯科衛生士有資格者の就労状況を把握するために、3 校の専門学校卒業生を対象にアンケート調査を行った。1,897 名にアンケート用紙を送付。そのうち 40.2%、762 名より回答を得た。762 名のうち歯科衛生士として就労している者（現職者）が 61.5%、他の職業に就いている者（他職者）が 14.8%、働いていない者（休職者）23.6%であった。他職者のうち 63.2%の者が、条件次第では歯科衛生士への復職の希望を持っており、そのうち 86.7%がセミナーへの参加を希望した。また休職者のうち 85.7%の者が近い将来の就労を希望しており、その大部分が歯科衛生士として復職したいと考えており、さらにそのうち 75.2%がセミナーへの参加を希望した。このような結果のもと復職支援セミナーを開催し、昨年度は 18 名、本年度は 10 名の参加者を得た。今後も衛生士不足対策の一環として継続開催したいと考えている。

10. 東日本大震災における被災地派遣の報告

三重県伊勢保健福祉事務所

○ 石濱信之

東日本大震災から 1 か月経過した時期に岩手県陸前高田市において支援活動を行ったのでその概要を報告した。【方法】支援活動期間は 4 月 8 日～4 月 12 日。支援場所は岩手県陸前高田市下矢作地区の避難所で、三重県からの保健師による被災者への健康状況調査に同行し、歯科的サポートを行った。【結果と考察】市内最大の避難所に仮設歯科診療所が設置され、各避難所には巡回歯科診療車の運行計画表と往診依頼時連絡先の掲示があり、既に歯科医療は確保されていた。しかし被災者の中にはカゼ症状を呈する人も多く、呼吸器感染症の蔓延を防ぐためにも口腔ケアが必要と思われたが、新しい歯ブラシ、歯磨き剤、デンタルリンス等支援物資の有効活用までは至っていなかった。派遣期間中に行政を含め歯科関係者の初回ミーティングがあり、福祉避難所での口腔ケアを優先させることとした。口腔の清潔の重要性を歯科専門職以外にも理解し普及してもらうことが必要であったが、今回の派遣は実働三日間であり、中長期にわたる現地での歯科に関するコーディネート必要性を認識した。

11. 当科におけるインプラント上部構造の種類に関する統計的検討

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 岩中義幸, 矢野聖敏, 永田 心,
奥村健哉, 野村城二

インプラント治療は欠損補綴の一選択として一般診療に広く取り入れられるようになってきている。そこで、当科のインプラント治療の傾向を調査する目的で、装着された上部構造の種類について検討した。【対象および方法】2010 年 4 月から 2011 年 10 月の 19 か月間に、当科でインプラントの上部構造を作製した 82 名（男性 24 名、女性 58 名、平均年齢＝52.1 歳）を対象に、埋入されたフィクスチャーの本数、上部構造の種類、維

持機構の種類について調査した。【結果】フィクスチャーの本数は合計 199 本で、下顎臼歯部は 77 本と最も多く埋入されていた。埋入されたフィクスチャーの上部構造の 96%が固定性上部構造であった。上部構造の種類はメタルボンドが 54.1%で最も多く、次いでハイブリッド前装冠が 35.2%であった。固定性上部構造の維持機構についてはセメント固定が 83%と多くを占めており、スクリュー固定は 17%であった。【考察】上部構造の種類としてメタルボンド、ハイブリッド前装冠が多数を占めているのは、患者の審美的要求が高いためと思われた。固定性上部構造の維持機構についてセメント固定が多数を占めているのは、審美性、機能的要件、天然歯治療で馴染んでいる方法であることが理由として考えられた。

12. 鑑別診断を依頼した口腔粘膜疾患とその経過

戸田歯科医院

○ 戸田喜之

開業して 36 年経過したが、未だに診断に迷う症例に遭遇する事がある。今回、三重大学医学部附属病院歯科口腔外科に診断を依頼し、その後経過観察中の 3 症例を報告した。【症例 1】頬粘膜に赤い網目状の病変が見られた症例。患者：55 才女性。主訴：右側顎関節症。既往歴：更年期障害、肝機能障害、貧血。現病歴：顎関節症は安定し、定期検診に来ていたが頬粘膜に赤い網目状の病変が出現した。経過：確定診断を依頼したところ、水疱性扁平苔癬と診断され、その後経過観察中である。【症例 2】歯肉に白斑の病変が見られた症例。患者：49 才女性。主訴：左側顎関節症。既往歴：非定型抗酸菌症。現病歴：顎関節症は安定し、定期検診に来ていたが頬粘膜に白斑が出現した。経過：確定診断を依頼したところ、白板症と診断され、その後経過観察中である。【症例 3】口腔底粘膜に黒斑が見られた症例。患者：39 才女性。主訴：左下 6 番破折。既往歴：なし。現病歴：以前、前医による歯科治療時にパーで軟組織を損傷し、その後黒色斑が出現した。損傷部位は癒着治癒している。経過：悪性病変の可能性は低

かったが、念のため確定診断を依頼。異物と診断され、その後経過観察中である。

13. 当科における口腔ケアの現況

山田赤十字病院歯科口腔外科

○ 中村真之介，角屋逸子，荒木弘子，
大市美鈴，西川圭子，小林しおり，
平野吉雄

当院では平成 22 年 10 月に口腔ケアチームを発足させたので、その活動について報告した。口腔ケアチームは歯科医師、耳鼻咽喉科医師、薬剤師、がん看護専門看護師、言語聴覚士、集中ケア認定看護師からなり計 8 名で構成されている。活動内容は、それまでの口腔ケア手順の改定、口腔ケア物品の検討、患者や病棟へのラウンド、がん化学放射線療法患者の口腔ケアなどである。平成 22 年 10 月から平成 23 年 9 月までの 1 年間で、ラウンドを行って口腔ケアを施行した患者は全 34 例で、男女比は 1.6：1 と男性に多い傾向にあった。年齢は 8 歳から 101 歳で平均年齢は 72.2 歳であった。80 歳代が最も多く、50 歳から 90 歳までの患者が全体の約 9 割を占めた。基礎疾患は悪性腫瘍が最も多く 13 例、続いて呼吸器疾患 8 例の順であった。主訴あるいは病棟からの依頼内容は、口腔乾燥が最も多く 18 例、続いて出血 11 例、口内炎 9 例の順であった。頭頸部領域のがん化学放射線療法前の口腔ケアは平成 23 年 6 月より開始し、現在まで 6 名の口腔ケアを施行している。当院は平成 24 年 1 月より伊勢赤十字病院となり、緩和ケア病棟も新設されるため、さらに口腔ケアの活動を発展させていきたいと考える。

14. 当院における周術期口腔ケアの導入

松阪市民病院歯科口腔外科

○ 宮崎くみ子，中西香織，川合幸代，
仲田美樹，原 浩子，奥田美穂，
三浦亜矢，速水 毅，村田明代，
野中計宏，高橋 元，松山博道，
中橋一裕

周術期における口腔ケアの有用性の検討で、大西らは周術期に専門的口腔ケアを行うことにより、術後の発熱や、誤嚥性肺炎を減少させ、結果的に平均在院日数を削減することができ、その結果、医業支出を2%削減できたと報告している。当院のように、DPCによる包括型診療報酬制度を導入している急性期病院にとって、平均在院日数の削減と医業支出の削減は非常に大きな意味を有している。今回、周術期口腔ケアの導入を始めたため、その概要を報告した。当院での周術期口腔ケアの全身麻酔件数に対する実施割合は、緊急手術、口腔外科の手術を除き、導入時の4、5月を除けば、平均約90%の実施率であった。また当院での5月から10月までの肺疾患、消化器癌の患者の術後発熱患者数は、周術期口腔ケア実施群と対照群でそれぞれ無作為に抽出した50名について38度以上の発熱件数を調べたところ、実施群に発熱件数の減少がみられた。今後も周術期口腔ケアを推進し、病院の経営面にも貢献していきたい。課題としては、術後口腔ケアの充実と、周術期口腔ケアの周知を含めて、地域との連携が挙げられる。

15. 市立四日市病院救命救急センターを受診した歯科口腔外科患者の臨床統計的観察

市立四日市病院歯科口腔外科

○ 猪子将成，長谷川正午，山本知由，
坂野彰人，小牧完二

市立四日市病院救命救急センター（以下 ER）は四日市市および周辺地域の救命窓口として平成22年度において25,957名の救急患者を受け入れている。今回われわれはERを受診した歯科口腔外科患者の実態について臨床統計的観察を行ったので、その概要を報告した。平成22年4月1日より平成23年3月31日までの1年間にERを受診した口腔外科患者364人を対象とし、性別、月別受診数、年代別、疾患分類、処置内容について検討した。性別は、男性215人、女性149人。月別受診数は4月が最多、2月が最少であり、年代別では10歳未満が18.7%と多くを占めた。疾患

分類では、外傷患者が全体の45.1%と最多であり、次いで、一般歯科疾患が34.1%であった。処置内容は投薬が61.9%、外科処置を必要とした症例は27.5%であった。年代別では10歳未満の受診が多く、受診内容は外傷が75%を占めていた。これは転倒などの偶発的事故、乳幼児の疾病に対する家族の機敏な対応が理由と考えられる。疾患別では、一般歯科疾患が34.1%と多く、他の報告と比較し特徴的であり、地域性が考えられる。一般歯科疾患は日中の診察時間内に歯科治療を受けるべきであり、夜間休日歯科診療所の利用を啓蒙する必要が示唆された。

16. 紀南病院歯科・口腔外科での外来受診患者の動向

紀南病院組合立紀南病院歯科・口腔外科¹

紀南病院組合立紀南病院外科²

○ 平本憲一¹，糸川美智子¹，南 奏子¹，
須崎 眞²

【緒言】開設10年目を迎えた当科の外来受診患者の動向について検討した。【対象】開設以来の外来受診患者、および追跡調査可能であった平成18年度から平成22年度までの初診患者を対象とした。【結果】受診患者数は平成18年度に減少した以後著変はないが、当院全科受診患者数は減少が続いていた。近隣の御浜町・熊野市・紀宝町では最近10年で約10%人口が減少していること、全科で最多時から1/4を超える医師数の減少、診療科の減少などが理由として考えられる。平成18年度から当科初診患者数に著変はなかったが、紹介患者数は僅かに増加傾向だった。性差は女性がやや多く、年齢は60から70歳代が多かった。居住地は熊野市、御浜町、紀宝町の近隣3市町で80%以上を占めていたが、尾鷲市、和歌山県、奈良県からの受診者も少なくない。齲蝕、歯周炎、義歯等の一般歯科的疾患を除いた口腔外科的疾患により受診した患者は新患患者の45%であった。このうち智歯周囲炎や根尖性歯周炎などにより抜歯を行った症例が最も多く35%を占め、顎関節症、外傷が続いた。

17. 膠原病患者の歯科疾患に関する検討

国立病院機構三重中央医療センター歯科口腔外科

○ 柳瀬成章, 鋤崎文子, 下田澄代,
高橋香織

膠原病患者は免疫系に異常があり, 種々の薬剤が投与されているため, 口腔内に何らかの影響が生じている可能性がある。そこで, 膠原病患者の口腔内環境に関して検討を行い, その概要を報告した。対象は14例(全例女性), 平均年齢は61.3歳(25~76歳)であった。疾患別罹患率は, 関節リウマチが最多で57.1%, 次いでシェーグレン症候群35.7%, SLE 14.3%の順だった。患者の78.6%にステロイドが投与され, MTX等の免疫抑制薬が78.6%に, 生物学的製剤が35.7%に投与されていた。また, ビスホスホネート剤が64.3%に投与されていた。安静時唾液量(吐唾法: 15分間)は, ほとんどの年代で正常であったが, 刺激唾液量(ガム法)は, 60歳代を中心に分泌低下がみられた。う蝕罹患率は100%で, 地域歯周疾患指数(CPI)は全例が3以上であった。特に55歳以上ではCPI 4(歯周ポケット: 6mm以上)がみられ, 高齢になるほど増加していた。三重県民の歯科疾患実態調査の結果と比較して, 膠原病患者では, う蝕, 歯周疾患の罹患率が高く, 要因として四肢の機能低下により, 適切な口腔清掃が行われていないことや, 唾液分泌量低下, 投与薬剤が影響している可能性が考えられた。

18. 三叉神経痛に対する局所麻酔薬の効果

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 北川真奈美, 山口晋司, 西浦美貴,
乾真登可

【諸言】今回, 三叉神経痛に対し2%リドカインを用い, 反復眼窩下神経または下顎神経ブロックを施行し, その効果について報告した。【対象】平成19年3月から平成23年10月までに口腔・顎顔面部疼痛を主訴に来科し, 第2又は第3枝領域三叉神経痛と診断した8例。【方法】2%リド

カインを用いて1ヶ月に2回を限度に下顎孔または眼窩下孔神経ブロックを施行した。必要に応じプレガバリン又はカルマバゼピンを併用した。

【結果】男女比は3:5と女性に多く, 平均年齢は76.4歳で, 既往歴には高血圧・不整脈・子宮癌などがあった。疼痛部位は第2枝領域が5例, 第3枝領域が3例で, 合併例はなかった。トリガーアクションは義歯装着時・咀嚼時・含嗽時・会話運動時で, トリガーポイントは上顎臼歯部に多かった。平均ブロック回数は5.1回, 平均有効期間は11週であった。また知覚麻痺はなかった。【結論】伊奈らは10%リドカインを用いたブロックの平均有効期間は60週, 知覚麻痺は約半数であったと報告している。今回の低濃度局所麻酔薬では効果の持続期間は短い, 副作用である知覚麻痺はみられなかった。今後は症例を重ね, 反復神経ブロックについて検討していく予定である。

19. 市立四日市病院歯科口腔外科における睡眠時無呼吸症候群への取り組み

市立四日市病院歯科口腔外科

○ 山本知由, 長谷川正午, 坂野彰人,
猪子将成, 小牧完二

【背景】近年睡眠時無呼吸症候群(SAS)はメディア等社会的な影響も受け, 地域中核病院にも来院するようになってきた。SASは様々な合併症を持ち, 継続的な治療が必要であるため, 各診療科の枠を超えたチーム医療が病院内外においても必要と考えられている。平成16年度より閉塞性睡眠時無呼吸症候群(OSAS)に対し, 口腔内装置(OA)での治療が組み込まれ, 歯科や口腔外科がSAS治療に深く関わる事になってきている。【目的】三重県での現在の睡眠治療の現状と, 市立四日市病院におけるSASに対するチーム医療及び, 地域医療連携での取り組みを示し, 今後のSAS治療の中での歯科口腔外科の役割を検討する。【結果】三重県では睡眠検査や睡眠医療を専門にしている医療機関は少なく, 当院でのSAS治療においても連携治療は十分ではなかった。OA作製依頼者の中ではCPAP脱落者が多く, 重症SAS患者がOA治療を施行していた。

OA 装着後の評価、継続治療の有無が不明なものが多かった。【考察】SAS は様々な合併症を持ち、継続治療が必要であるため、他科や他病院とのさらなる連携が必要と考えられた。当科においても SAS の継続治療を行う上で、周囲の開業歯科医院との連携も必要と考えられた。

20. 舌痛症に対するパロキセチン塩酸塩の効果

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 堀 晃二, 伊藤佳秀, 奥村健哉,
乾真登可

近年、舌痛症に対して Selective Serotonin Reuptake Inhibitors (SSRI) の有用性が示唆されている。しかし舌痛症に対する SSRI の投与基準はなく、われわれは以前、軽症うつ病の診査で用いられている Self-Rating Questionnaire For Depression (SRQ-D) の有用性について報告した。今回は舌痛症と診断された患者について、SRQ-D の判定別に SSRI の投与量を変え、効果について臨床的検討を行ったので報告した。対象患者は平成 22 年 1 月から 1 年 8 ヶ月間に当科を受診し、舌痛症と診断し SRQ-D を施行した 25 例とした。男女比は男性：女性＝5：20、平均年齢は 65.3 ± 14.4 で 44～86 歳に分布していた。SRQ-D において 10 点以下（ほぼ問題なし）を A 群（9 例）、11～15 点（境界）を B 群（6 例）、16 点以上（軽症うつ）を C 群（10 例）と分類した。パロキセチン塩酸塩の投与は 1 日 1 回、眠前に経口投与とし、A 群には 5 mg、B 群には 10 mg、C 群には 20 mg を投与した。効果判定は 4 週間隔で VAS scale を用いた。1～4 週での有効率は A 群 42.9%、B 群 60.0%、C 群 33.4%であったが、4 週以降の有効率では症例数は少ないが、全群において 100%であった。【結論】舌痛症の舌痛緩和にパロキセチン塩酸塩は有効である事を示した。

21. 抜歯後出血をきたした動脈瘤による慢性 DIC の 1 例

榊原温泉病院歯科口腔外科¹

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学²

○ 渡邊由裕^{1,2}, 乾真登可^{1,2}

今回われわれは、解離性大動脈瘤に伴う慢性 DIC が原因と考えられた抜歯後出血の 1 例を経験したので報告した。【症例】91 歳、男性。【主訴】下顎義歯の不適合。【現病歴】数日前より下顎義歯による痛みを自覚し当科受診。【既往歴】外傷性脾破裂、解離性大動脈瘤、高血圧症。【現症】皮膚、四肢に出血斑は認めなかった。口腔内では下顎義歯床下に周囲歯肉が軽度発赤した右側下顎犬歯の残根を認めた。【処置および経過】右側下顎犬歯歯肉炎の診断の下、内科主治医に対診後、抜歯した。翌日出血を認めたため縫合止血。第 6 病日目に少量の出血を認めたため圧迫止血。第 9 病日目に再出血を認めたため縫合止血。第 11 病日目には持続的な出血を認めたため、当院内科に対診しさらに詳細に凝固線溶系検査を行ったところ、線溶系の著明な亢進が認められ、解離性大動脈瘤を原因とする慢性 DIC と診断された。治療は新鮮凍結血漿を投与し、第 13 病日目に止血した。【まとめ】動脈瘤病変を有する患者の抜歯等の外科処置に際しては、DIC 状態にあることもあるため、術前の十分な問診、血液一般ならびに止血機能検査を行い慎重な対応が必要であると考えられた。

22. 内部に石灰化物を有した鼻口蓋管嚢胞の 1 例

市立伊勢総合病院歯科口腔外科

○ 服部雄紀, 木下靖朗, 前多雅仁

今回われわれは、内部に石灰化物を有した鼻口蓋管嚢胞の 1 例を経験し、石灰化物の分析を行ったので報告した。患者：55 歳、女性。現病歴：初診約 2 週間前、食事中に箸で口蓋部を刺し、同部の腫脹および疼痛を自覚したため、近歯科医院を受診し、紹介により来科した。現症：口蓋正中

部に無痛性の腫脹を認め、咬合法 X 線写真にて同部に拇指頭大の類円形、境界明瞭な透過像と内部に凹凸を示す歯冠大の不透過像を認めた。上顎前歯部に失活を疑う所見はなく、根尖と透過像との連続性はなかった。処置および経過：局所麻酔下にて嚢胞摘出術を施行した。摘出した硬固物はマイクロ CT、電子顕微鏡にて中心部に核を有し、周囲に層状構造を認め、歯牙様構造は認められなかった。EDS、X 線回折にて硬固物は酸素、カルシウム、リン、マグネシウムを全域に認めるリン酸カルシウムであった。病理組織所見では、嚢胞壁は扁平上皮に裏装された結合組織で、上皮下に腺組織は認めず、石灰化物外側には菌塊の付着を認めた。以上の所見より内部に石灰化物を有した鼻口蓋管嚢胞と診断した。術後約 8 か月経過した現在、再発なく経過良好である。

23. 角化嚢胞性歯原性腫瘍の 2 例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 伊藤佳秀，奥村健哉，乾眞登可

【緒言】角化嚢胞性歯原性腫瘍は全摘出や顎骨切除が行われるが、腫瘍が大きな場合には開窓術が行われる。今回、開窓術を行った角化嚢胞性歯原性腫瘍 2 例について報告する。【症例 1】30 歳、男性。5 年前より左側下顎骨の膨隆を自覚し、同部の増大、開口障害が生じたため、紹介にて当科受診となった。CT にて右下 3 部から左側下顎枝にかけて左下 8 を含む多房性の透過像を認め、上方では境界明瞭、下方では境界不明瞭であった。生検にて角化嚢胞性歯原性腫瘍との診断を得た。腫瘍は大きく全摘困難であったため、第 28 病日に開窓術を施行。第 284 病日に再掻爬術を施行した。現在、病変の縮小を認めている。【症例 2】75 歳、女性。左側頬部腫脹、疼痛のため、紹介により当科受診となった。X-P、CT にて左側下顎骨に多房性の境界明瞭な透過像を認めた。生検にて角化嚢胞性歯原性腫瘍との診断を得た。全摘による下顎管の損傷を避けるため第 71 病日に開窓術を施行した。現在、外来にて経過観察中である。【考察とまとめ】開窓術を施行し、縮小した症例は 64%との報告があり、腫瘍が大きな症例

では QOL を考慮し、開窓術により縮小を期待する方法も考慮すべきであると思われる。

24. 上顎骨に発生した炎症性偽腫瘍の 1 例

松阪市民病院歯科口腔外科

○ 高橋 元，松山博道，中橋一裕

炎症性偽腫瘍（以下 IPT）は腫瘍に類似した病変であり、筋線維芽細胞ないし線維芽細胞の特徴を示す紡錘形細胞の増殖と炎症細胞の著明な浸潤からなる。IPT と診断されてきた病変が反応性から真の腫瘍まで複数の疾患単位を含んでいることから、明確な定義や診断が困難である。また悪性腫瘍を否定できず外科手術を必要とする場合などの診断に苦慮する例は少なくない。今回、我々は悪性疾患を思わせる上顎骨 IPT の 1 症例を経験したので報告した。患者は 41 歳男性。初診 6 日前、左上側切歯の咬合痛を主訴に近歯科医院を受診。X 線透過病変を同根尖部に認めたため当科へ紹介された。CT では辺縁不正な悪性様所見を認めたが生検結果では IPT が疑われた。同年 8 月 CT で病変拡大を認め全身麻酔下にて上顎骨部分切除術を施行。病理組織学的には IPT であったが、画像上では浸潤性増殖傾向から炎症性筋線維芽細胞性腫瘍（以下 IMT）が示唆された。IMT には再発、転移報告があり、再発例では悪性度が増加する傾向にある。現在、経過良好であるが今後も十分な経過観察を要するものとする。

25. 頬粘膜扁平上皮癌と上行結腸癌の重複例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 伊藤竜也，加藤英治，佐藤 忠，
野村城二

口腔癌患者の重複癌は上部消化管に多く、下部消化管との報告は比較的少ない。さらに上行結腸との重複癌症例は極めて稀である。今回、頬粘膜扁平上皮癌と上行結腸癌の重複例を経験したので報告した。【症例】67 歳、男性【主訴】右側頬

粘膜部白斑【現病歴】当科初診約4ヶ月前より右側頬粘膜部の摂食時疼痛を自覚したため、近歯科医院を受診。精査治療を目的に紹介受診となる。

【口腔内所見】右側頬粘膜部に約43mm×28mmの白斑病変と一部にびらんを認めた。【画像所見】FDGによるPET-CTでは右側頬部の集積に加え、上行結腸部にSUV 11.6の異常集積が認められた。【臨床診断】右側頬部悪性腫瘍による転移性上行結腸癌の疑い。【処置および経過】頬粘膜部は当科にて生検を行い、上行結腸は消化管外科対診により内視鏡下での生検が行われ、扁平上皮癌および管状腺癌の診断を得た。治療は右側頬粘膜腫瘍切除術および結腸右半切除術を施行、術後は経過良好にて外来followを行っている。

【最終診断】右側頬粘膜扁平上皮癌および上行結腸管状腺癌の重複癌【まとめ】今回、FDGによるPET-CTにて初期症状に乏しい上行結腸腺癌を早期に発見することができた。たとえ早期の口腔癌であっても重複癌も念頭に置き、全身検索を行う必要があると思われる。

26. 口蓋部に発生した骨髓肉腫の1例および文献的考察

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 土性博文, 清水香澄, 松村佳彦,
野村城二

骨髓肉腫は骨髓細胞由来の腫瘍形成性腫瘍と定義され、急性骨髓性白血病(AML)と深い関連性があるとされており、口腔領域での発症は比較的古くである。今回、軟口蓋部に発生した骨髓肉腫を機にAMLと診断された1例を経験したので、その概要と文献的考察を併せて報告した。

【患者】68才、男性【主訴】口蓋粘膜の接触痛

【現病歴】初診約1か月前に同部の疼痛を自覚し、近内科で腫瘍性病変を指摘され来科した。【画像所見】MRIにて軟口蓋部に造影性の高い像を認めた。【処置および経過】悪性腫瘍を疑い同部より2度の生検を行ったが悪性所見はみられなかったため、耳鼻咽喉科に依頼し、咽頭側より生検が施行された。病理組織学的に好酸性顆粒状の細胞質と大型、異型核を有する腫瘍細胞がびまん性に

増殖しており、免疫染色でミエロペルオキシダーゼ染色に陽性を示したことより骨髓肉腫と診断された。また同時に行われた血液検査で、芽球が25.5%存在していたため、白血病を疑い血液内科を対診したところAMLと診断され、化学療法が行われたが、効果はみられず、呼吸不全にて死亡した。【まとめ】我々が渉猟し得た限り1970～2011年までの英文による口腔領域での本症の報告は53例、そのうち軟口蓋での発生は自験例を含めて2例のみであった。

27. 右側下顎周辺型エナメル上皮腫の一例

済生会松阪総合病院歯科口腔外科

○ 佐藤耕一, 高井英月子, 鈴木康昭,
稲垣奈央子, 田中千賀, 川口治奈,
近田紀子, 日浦美和

【緒言】エナメル上皮腫は顎骨に発症する最も代表的な歯原性腫瘍であるが、周辺型エナメル上皮腫は希な疾患である。今回、我々は比較的大きな周辺型エナメル上皮腫を経験したので報告する。

【患者と経過】患者は79歳の男性。右側下顎の悪性腫瘍を疑う腫瘍の治療目的に当科を受診した。右側下顎臼歯部に一部表面が乳頭様、弾性やや硬、周囲より隆起した腫瘍を認めた。腫瘍の最大径は33mmで、病理診断は濾胞型エナメル上皮腫であった。手術を予定したが、左側下顎歯肉の疼痛を訴えて再診、その4日後には左側下顎から頸部にかけての著明な腫脹を認め、CTにて下顎骨周囲の軟組織にガスの貯留をみ、左側下顎の含歯性嚢胞に起因すると思われるガス壊疽と診断した。緊急手術にて、左側顎下部の切開、気管切開を行った。順調に消炎治療が進み、術後14日目に退院となった。その後、再度入院、エナメル上皮腫に対して予定通りに、下顎骨区域切除、腸骨移植、金属プレート固定を行った、術後5ヶ月になるが、特に問題なく経過している。【まとめ】周辺型エナメル上皮腫の治療経過中にガス壊疽を発症した症例を経験したので、その概要につき報告した。

28. 歯肉転移を来した肺多形癌の 1 例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 橋本麻衣子, 永田 心, 松村佳彦,
野村城二

今回我々は下顎歯肉への転移を来した肺多形癌の 1 例を経験したので報告した. 【症例】83 歳女性【主訴】下唇の知覚異常【既往歴】10 年前, 両肺腺癌にて切除術. 2 か月前, 右肺多形癌, 右副腎, 肝転移にて放射線およびラジオ波焼灼術. 【現病歴】初診 3 日前より同部の白斑と知覚鈍麻を自覚し改善がみられないため来科した. 【処置および経過】初診時には特に異常はなかったが, 初診 9 日目に右下 34 歯肉部に約 30 mm 大の腫瘤を認め, 生検を施行した. 病理組織学的に肺多形癌と類似の像を示し, さらに免疫染色で CK 7: 陽性, CK 20: 陰性であったことより肺多形癌の転移と診断された. その後腫瘍は急速な増大を示し, 初診 19 日目には 70 mm 大に増大したため, 化学放射線療法 (放射線総量: 55 Gy, 抗癌剤: DXT 総量 39 mg) を開始した. 22.5 Gy 照射完了時より腫瘍は徐々に縮小し, 終了時には完全に脱落した. しかし, 消化管内視鏡検査で小腸転移がみられ, 小腸腫瘍切除術が施行されたが, 術後全身状態が悪化し, 初診より 69 日後に死亡した. 【まとめ】本腫瘍は抗癌剤, 化学放射線治療に無効であるとされているが自験例のように良好に反応する例もあることから化学放射線治療は本腫瘍に対し考慮すべき治療法の 1 つと考えられた.